

自然描写 背景に戦争

文人の 武蔵野

大岡昇平(1909〜88年)は、地理の人でした。自らの幼年期、少年期を育んだ渋谷の地理や風物を回想した自叙伝「幼年」「少年」を発表した際には、自作の渋谷の地図も掲載しています。地図には、国木田独歩(1871〜1908年)が住んでいた当時の家が明記されています。独歩が没した翌年に生まれた大岡は、独歩が渋谷に任んで書いた「武蔵野」を意識して「武

大岡昇平 ⑬



大岡昇平の自叙伝の「幼年」と「少年」(武蔵野市で)

蔵野夫人」を書きました。独歩が東京から訪れた散歩者の眼差しから武蔵野を描いたのに対して、大岡は武蔵野

の地に根差す者の心理と、安易に心象地理に回収され得ない武蔵野の地理を描写しました。

「武蔵野」と「武蔵野夫人」の舞台となった小金井は、2人にとって故郷と言える場所ではありません。ただし大岡には、渋谷時代の親友が家族で引っ越した先が小金井であったため、小金井の家に身を寄せた経験がありました。

「武蔵野夫人」が独歩の「武蔵野」よりも訪問者ではなく在住者の立場から書かれているのは確かですが、土着的な定住者ばかりを取り上げてよそ者と対比しているわけではありませぬ。特に大岡が主人公と目した「勉」には、武蔵野から外地に出征して帰還した引き揚げ兵士の性質と視点が付与されています。その特性の一つは、南方の戦地の自

然に職業的に接して培われた地形への強い関心でした。

「勉」の自然環境への強い関心には戦争が関与し、それは自然史への想像力を伴うものでした。明治期における独歩の「武蔵野」が、都心との境界にある武蔵野の風景だったとするならば、大岡の「武蔵野夫人」には、昭和期における武蔵野を形作る古代武蔵野、古代多摩川への眼差しがありました。

「武蔵野夫人」が描いたのは、古代武蔵野から継承された時空間です。古代多摩川を水源として形成されてきた丘陵や、「はげ」などの地形とそこで生を育んできた動植物と人間の変化の記憶が刻まれています。武蔵野は軍都でもありました。空襲を経てなお残る「はげ」の道と豊かな湧水があり、富士の山が見渡せ

る武蔵野が小金井を中心に示されました。

武蔵野における地形や生態系は、近代化が導いた戦争という文明の産物により甚大な影響を被りました。「勉」はその戦争の担い手である兵士であると同時に、地形や生態系の観察者でした。1950年に発表された「武蔵野夫人」における「勉」は、人為と野生、加害と被害、自然破壊と自然保護の双方の要素を併せ持ち、両者の境界線を撤廃するような今日的なキャラクターであったように思います。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。Rコードから。

